



Title	人間関係の形而上学 : The Longest Journey 論
Author(s)	今沢, 達
Citation	Osaka Literary Review. 1965, 4, p. 84-99
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25765
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

人間関係の形而上学： *The Longest Journey*論

今 沢 達

E. M. Forster が人間関係 (personal relationship) を信ずるという彼の信条を最も端的に語ったエッセイ ‘What I Believe’ は G. D. Klingopulos によれば、Forster がそれを公けにした 1939 年以後第二次大戦の間、実に多数の様々な人々の meeting-point であった。この作家が英國のどこかにいるという事実だけで人々にとって reassuring であったと言う。^① この小論の目的は *The Longest Journey* (1907) において、このような精神的な影響力としての Forster の信条を支えているものは何か、Forster をして人間関係を信じさせているものは何か、‘What I Believe’ の単純で力強い文体を支えているのはどういう精神かを探究することにある。

The Longest Journey をとりあげた理由はこれが作者の魂の自伝とも言わるべき作品であり、^② 彼が最も好み、書いたことを最も嬉しく思っている作品であること、彼自身がこの小説において自分の言いたいことに最も近づいている、と一度ならず語っていること、長篇の中ではこれのみが靈感によって成ったものであること、^③ また人間関係の内面的な条件をこれほど執拗に描いたものはないと考えられることなどである。

I

物語は Cambridge の Rickie の部屋で学生達が電灯を消して the cow は人が見ていなくても存在するかという哲学の問題を議論しているところから始る。主人公 Rickie の性格を形成した過去の出来事で小説のプロットにとって重要な事件は巻頭では既に済んでしまっている。彼にあるのは孤独な家庭生活と跛ゆえのパブリック・スクールの惨めな体験の記憶であり、それらの記憶とは対照的なこの一年間の Cambridge 生活の

歓びである。ここで彼のいじけた精神は花ひらき、想像力は燃えたち Forster 自身のものに似た短篇をいくつか書き友人もできていた。しかしながら彼は議論には加わらず、the cow という言葉に彼の intellect ではなく imagination が触発され牧場の光景を色々と想像して楽しむばかりである。そこへ Agnes が入って来て若き哲学者は Ansell を除いてみんな去る。Ansell は手をさし出す Agnes を無視し、彼女が存在していないかのように振舞う。あとで Rickie が Ansell の無礼な振舞を責めると Ansell は誰にも会わなかつたと言う。Rickie は友人のひくピアノのワーグナーに合せるかのように登場した Agnes は empress のように美しかつた、それに昔、非常に親切にしてくれたと彼女を弁護するが Ansell は誰も入つて来なかつたと言い張る。Rickie は先程の議論で Ansell の主張した实在論を借りて、Agnes の存在を主張するが Ansell は「現象には二種類あつて、一つは real existence をもつものであり、他は diseased imagination の産物で、それに the semblance of reality を与えると我々自身が滅びてしまうものだ」(p.24)^④ と反論する。そして彼は正方形の中に円を、その円の中に正方形を、その中に更に円を描き、これ以上は描けなくなつた中心が ‘real’ なのだと言う。彼には Agnes がこの意味で real ではないのだ。ところが Rickie には Agnes の美しさ、健康さ、親切さが real なのである。このように Agnes をめぐつて Rickie と Ansell は鋭く対立する。Agnes とその兄 Herbert Pembroke は Rickie の近所に住んでおり、両親を失つた Rickie に親切にしてくれた。ところが Rickie の家 Elliot 家や Pembroke 家の所属するのは、Forster が批判する ‘Solidity, caution, integrity, efficiency. Lack of imagination, hypocrisy’^⑤ を特徴的な性格とする英國中産階級社会の別名 Sawston であり、Herbert Pembroke がパブリック・スクールの教師であることは、Pembroke 兄妹の Sawston 的性格を増すものである。Agnes をめぐる対立と見えたものも実は Sawston をめぐる対立だったのだ。Ansell は Agnes の本性を見抜くが Rickie には彼女がその美と健康ゆえに、彼の理想とする Nature の世界、Wiltshire を代表するものと見えるのである。

しかしながら、Rickie の態度は曖昧で頼りない。例えば、Pembroke 兄妹を招待しておきながらそれを忘れ、食堂へ二人の食事をとりに行って

もぐずぐずして遅れる。Agnes の Wiltshire 的要素に魅かれながら、実は彼女の Sawston 的要素に意識の下では反発しているのである。また兄妹との会話の中で友人 Ansell の言葉そのままに「理想を持たない」と断言しながらそれに続く言葉を思い出せないことから、intellect の秀れた尊敬する友 Ansell から受けた影響がどの程度のものかが推し測られる。これらの例は Rickie の heart や head が、彼の意欲は別として、現実には純粹なものではないことを物語っている。

Agnes は Rickie の左右不揃いの靴を見て戦慄を覚えるが、Agnes の恐怖感は Rickie が自らの肉体に対して懷く恐怖感でもあって、この意識と肉体の分裂が上に述べた Rickie の曖昧な態度の源なのである。Rickie が Agnes (肉体的に健康な人) の美点を認めて、彼女と友交関係を結ぶのは、実は自らの意識と肉体に統一をもたらしたいという欲求に基づくものなのである。ところが Ansell の intellect の眼には Agnes は存在しないのであって、彼女は Rickie の diseased imagination の産物にすぎないのである。Rickie の精神が結合を求め、できるだけ多くの人を認めようとするのに対して Ansell の精神は区別を求める。Cambridge に投げ込まれた Agnes は Rickie には Wiltshire の Ansell には Sawston の像を映すのである。啞然とする Rickie を尻目に Ansell が手をさしのべた Agnes を無視する場面は Cambridge, Sawston, Wiltshire の三部から成るこの小説の構造と意味を一挙に照らし出して極めて象徴的である。

Agnes 登場の場面での Rickie の態度はまた Cambridge での肉体的に恵まれた友人たちへの接近となって現われ、そこでも Ansell は区別の必要性を説く。この Rickie の肉体讃美は Agnes とその婚約者 Gerald の接吻の場面を瞥見して恋愛の讃美となり、更に Gerald が急死し、愛と死という最もロマンチックな出来事に遭遇するに及んで彼は the splendours and horrors of the world に驚嘆してしまう。再び Ansell はどんな人間をも無上の「興味」と「悲劇」と「美」をもった驚嘆すべきものと考えるのは、「興味あるもの」を「退屈なもの」から、「悲劇的なもの」を「メロドラマティックなもの」から、「美しいもの」を「醜いもの」から区別することを厭う精神だと批判する。ところが Rickie は Ansell は現実を知らないからそんなことを言うと考えて耳をかさない。

卒業を目前に控えて二人はまた衝突する。例の Agnes 登場の象徴的な場面では Agnes が二人の中にあったが、今度は逆に the great world に入りてゆく Cambridge が対立を招くものとなる。前の場合とは逆に Rickie が話題の対象 Cambridge に懐疑的であり、the great world に心を奪われている。それに対して Ansell は “There is no great world at all, only a little earth, for ever isolated from the rest of the little solar system. The little earth is full of tiny societies, and Cambridge is one of them. All the societies are narrow, but some are good and some are bad — just as one house is beautiful inside and another ugly.” (p.74) と言う。しかし Rickie は fellowship をとるために大学に残って研究する Ansell には、所属すべき家もなく the great world に出て行く孤独な自分の気持が分ってもらえないと思う。Rickie と Ansell の対立は Rickie が Agnes と婚約するに及んで頂点に達する。Ansell は彼の眼には見えない女と Rickie の結婚に当然強く反対する。彼によれば、Rickie が幸福なのは全世界の美を a single peg に掛けたからであり、Agnes が幸福なのは彼を征服したからだ。彼は手紙で many people を愛する者は結婚すべきではないと言うが、Rickie は友情も結婚も文学も自由も同時に獲得するのだと返事する。

ここで舞台は Cambridge から離れ、同時にこれまで Rickie を批判し続けた Ansell も後方に退く。Rickie は Agnes とともに Wiltshire にある叔母の家 Cadover に Mrs. Failing を訪問する。Agnes 登場の場面とは逆に Combridge が Wiltshire へ入る。ここで Rickie は眞の Wiltshire である Stephen に直面しながら、偽りの Wiltshire, Agnes に妨げられて、粗野な Stephen を腹ちがいの弟として accept することができない。ここで Ansell の役割を果すのは Mrs. Failing である。Ansell の批判精神とちがって彼女の snub は気まぐれで意地悪である。だが青春のロマンチズムに挫折を経験している彼女には Ansell 同様人間の弱点がよく見えるのである。この Mrs. Failing の存在が、しかしながら、Rickie に Stephen を accept させない原因の一つとなる。前に Ansell の反対にもかかわらず Rickie は Agnes を受け入れ今度は Mrs. Failing の Stephen 札譲にもかかわらず (Rickie の父や叔母に

対する感情から言えば「礼讃ゆえに」と言ってもよい。) Rickie は Stephen を斥ける。彼が Stephen を accept できる機会は二回あるがいずれも Agnes に妨げられる。その二度目の機会において、Stephen の“Elliot!”と呼ぶ声に応じようとする Rickie の前に Agnes が立ちはだかる場面は小説の頂点であり Rickie のいわゆる「象徴的瞬間」である。それ自体は些細なものであるが、それを accept すると人生を accept することができ、気を顛倒させてそれを拒絶すれば、その瞬間は二度と与えられないのだ。Rickie の内面では彼の嫌悪した父の息子だが弟にはちがいない Stephen を認め、そのことを彼に話さねばならないという道德上の要請と Agnes の美の二つが衝突する。ところが現実は逆であって、それは彼の理想の世界 Wiltshire と彼の反発する Sawston の世界の衝突なのであった。

Rickie はその二つのうちの Agnes をとるが、これは結局彼を Sawston のパブリック・スクールへ導くことになる。Sawston に入ってみると、結婚生活も期待したものではなく、Herbert に導かれてやかまし屋で規則一点ばかりの教師という安易な道にはまり込む。耳の大きな生徒 Varden が生徒達に乱暴される事件、本来なら Rickie の友となるべき古典学者を敵に廻すことになる通学生制度廃止、跛の赤ん坊の誕生と死などを経て unreality の雲の中に落ち込んでゆく。友人と文学の仕事と自然から切り離され、彼は Stephen に真実を語らなかつたことが全ての間違いの源だと気づき二度まで打明けようと思うが Pembroke 兄妹に圧倒されてどうすることもできず deteriorate¹ するのみである。彼の Beatrice, Agnes が導いたのは Paradiso ならぬ unreal な Inferno であった。学校の寮名 Dunwood に obscure wood (Dante の selva oscura にあたる) という意味があるのも偶然ではなかったのである。

しかし、物欲、支配欲に従って行動した Agnes が結果的には Stephen と Ansell を Dunwood House に呼び寄せたことになって、Ansell は Stephen と出会って彼の中に彼が本の中で発見したものを見出す。Cambridge はここにはじめて眞の Wiltshire に出会うことになる。Ansell と Stephen は合体して Rickie を Inferno から救い出そうとする。Stephen が Rickie の思い込んでいたような父の息子ではなく母の息子であることが明るみに出される。今度は Rickie は Ansell も認

める Stephen と自由に結びつくことができるわけだ。彼は Dunwood House で一緒に暮そうと Stephen を説得するが、その時彼は Stephen に与えようとして手に持っていた母の写真ばかりを眺めて Stephen の眼を見ない。Stephen は腹を立てて写真を破ってしまう。対象の選び方は間違っていなかったのだが、彼は Stephen の中に母の姿を見ていたにすぎないので。

ところで、何年も前の人間の行為の結果である兄弟としてのつながりのためではなく、現にともに生きている人間と人間として、君を駄目とした Pembroke 兄妹の許を去って、一緒に行こうとする Stephen の言葉よりはむしろその声に魅かれて Rickie は迷いの森から去る。声は母の生命の本質を伝えるものだったのだ。

Ansell 家のはからいで Stephen は Scotland で農業をし、Rickie は Ansell の家で長篇小説を書く。Agnes から家へ帰るよう Rickie を説得してくれと依頼された Mrs. Failing は Rickie を Cadover に招く。Rickie は今や sense of reality を回復し健康になり小説を書き自信を得て意気揚々と Cadover へ来る。Stephen も一緒に来るが Rickie は途中で今夜だけは酒を飲まぬよう約束させる。彼は Scotland へ行ってから、それまで以上に大酒するようになっていたのだ。彼は Cadover へ戻ると、水に帰った魚のように彼を育てた Wiltshire の自然の中で生々とした生命に満ち溢れる。flame boat を川に流す場面のリリシズムは V. Woolf や J. B. Beer の絶讃するところだが、その光景の象徴性を主人公が意識しそれに酔っていることが、その象徴性にもまして重要な点である。これまでの Rickie の魂の遍歴はこの酔いと覚醒とのリズミックな交代の歴史であった。酔いからの最後の覚醒が Stephen が約束を破って酒を飲んだことを知った時彼を襲う。Stephen は最後には酒によって滅び、彼とともに母の生命も子孫に伝わらないで滅びるだろう。Stephen の中の Nature を安易に信じ、彼に社会を改革する英雄を見たことは間違いであった。今はやはり Agnes, Herbert, Mrs. Failing の支配する Sawston へ戻らねばならない。Rickie は再び夢に破れてこう痛感する。最後に彼は酔っぱらって線路に寝そべっている Stephen を近く列車から救って自らは膝を擦かれ彼のいわゆる「不吉な家」 Cadover で Mrs. Failing に「あなたが正しかった」と言って死ぬ。.

II

Rickie はできるだけ多くの人を愛しようとした。彼の原理は inclusion であり connection であった。それは混沌とした現実をすべて受け入れて、そこから秩序ある世界を生み出す芸術家の方法であった。もともと彼は ‘to help boys in the anxieties that they undergo when changing into men’ (p.186) を Cambridge 在学中に彼の生涯の義務の一つに数えていた。Cambridge が彼を不幸な少年時代から救ってくれたように、彼の作品が青少年の助けとなることを望んだのだ。彼の小説は彼が Cambridge で受けた広い意味での教育を芸術という形で表現したものになる筈だった。

それでは彼自身の失敗は何によるのか。それもまた将にその Cambridge での教育そのものを彼自身が十分身につけていなかつたことに原因があるのだ。実際、「Cambridge では友情という土壤に君の精神はしっかり根を張っている筈なのにどうして浮草のように落着かないのか」(p.75) と Ansell に問われて、友情を register する制度があればよい、象徴なしには人間は長く記憶していることはできないからと答える。これに見られるように彼には生身の人間ではなく、人間の中に象徴を見るという強い傾向がある。その傾向が Ansell, Agnes, Stephen. との関係においても現われる。彼が Ansell の intellect を尊重して事があれば相談しようとするにもかかわらず、最も critical な時に彼の忠告を受け入れられなかつたのは、彼が Ansell に見ていたのは彼が Ansell に貼りつけた intellect というレッテルであり、シンボルであつて、人間 Ansell ではなかつたからである。Agnes には愛のヴィジョンを見、結婚によってそのヴィジョンを我がものにしようとした。しかしヴィジョンはどんな手段によつても現実とはならない。彼は結局 Agnes を偶像化し、それによつて人間 Agnes を堕落させた。Stephen に対しても同様であった。最初は彼に父を見、父の記憶から彼を判断し彼を拒絶した。次に彼に母の姿を見、祖先から伝わつて來た生命と、因縁を打破する英雄を見たのだが、一個人の間として彼に接することはできなかつた。こうして Rickie はいずれの人物とも望ましい人間関係を結ぶことができない。友情の登記制度を求めることがそもそも人間を信頼していない証拠である。ところが ‘What I Believe’ に言うように、人間関係は reliability によるものであり、

それは契約によるものではないのだ。^⑧

第28章の貨幣の比喩を用いるならば Rickie は自分の精神の貨幣に Gerald と Agnes の抱擁の姿を, Stephen の姿を, Ansell の intellect をそして何よりも母の姿を打ち込み, その起源を忘れ, それらの images そのものを神聖視した。そこに彼の過ちがあった。その貨幣では買えない宝物のあることを彼は知らなかつたのだ。intellect よりはむしろ instinct と imagination によってよりよく自らの能力を発揮できる Rickie の精神は個別的なものの中に普遍的なものを見たが, 個別的なものが直ちに普遍的なものではないことを自覚せず, 両者を混同し, 両者を明確に区別することができず, そのため普遍的なものから個別的なものへ帰ると, その差異の大きさに圧倒され break down するのである。Ansell の精神は徹底的に普遍的なものを信じたが故に, Rickie を批判することができたのだ。

Rickie は友情に登記制度のないことから, 結婚を選んだと言えないこともない。それでは, 彼の失敗は結婚を選んだことにあるのだろうか。これについては, 全篇を通して何度も言及される Shelley の *Epilepsychedion* から引かれた passage を見るのがよい。

それはまず Ansell が Rickie の結婚に反対する手紙の中で現われる。「君は many people を愛することを欲し, 必要としている。そういう人間は結婚すべきではない。『君はあの偉大な一派に属したことはなかつた』彼らはただ一人の人のみを好きになることができるのだ。もし君がそこへ加わろうとしたら, 破滅するだろう」(pp.94—5) と彼は言う。Shelley の詩句は友情と結婚, many people と one person only の対立を意味するものとして引かれている。「偉大な一派」とは結婚を選び, one person only をとる人々のことである。これが次に現われるのは Rickie が婚約後その passage を読む場面においてであり, Rickie は大学時代に very good と書き込んだその passage が今は inhuman だと感じる。しかし, Stephen が母の子であることを知り, 失敗だった Agnes との結婚生活から立ち直ろうとしている時, 彼は「偉大な一派」には属さないと Herbert に言う。

それではこの引用箇所を通して Shelley と同じく結婚に反対しているのかというと, 実はそうではなく Forster の意図は結婚そのものではな

くロマンチックな結婚観を打破することにある。それは上の passage の最後の echo である次の場面に見ることができる。Stephen は Rickie と Cadover へ馬車で行く途中彼の結婚観を語る。Rickie とちがって、彼は人間の考えは any single person に所属するものではなく、妻に何でも打ち明けたりなどしないと考える。人間は完全に所有することも、また完全に所有されることもできないものなのだ。Shelley の詩に言う結婚も the code of modern morals であるが、Shelley が *Epipsychedion* で讃美したロマンチックな愛もまた the code of modern morals なのであり、それ故に popular なのだ。eternal union, eternal ownership は普通の人間には tempting baits である (p.301)。Forster が Shelley の詩句を用いて言おうとしているのも、貨幣の比喩で言ったことと同じなのだ。a single person を偶像化する危険性を説き、結婚を人間と人間の結びつきという最も基本的な位置にまで引き戻そうと試みているわけで、その信頼関係の上にこそ幸福な結婚があると言っているのだ。

III

それでは、Rickie を破滅においやる彼の觀念化への傾向、理想への逃避の衝動は何によるものか。それは彼が父から受け継いだ Elliot 家の血に起因するものであった。彼は18世紀の末頃何か後ろめたいことをして財産を築いた英国の中産階級上層の一家族の歴史を担っているのである。

Rickie の父や叔母も祖父からの遺伝で跛である。父は声の美しい女に恋をして結婚するが、彼女が彼の欲するように家の中を整頓し美しくすることができないことを知ると直ちに別居し情婦をつくる。叔母は自由主義的なヒューマニストである Mr. Failing に恋をするが、彼が農場で理論を実践に移し退屈な生活が始まると夫に対する愛情を失う。父も叔母も、相手が独立した人間として動き始めると愛を失ってしまう。彼らは最初から相手を愛していたのではなく一方は肉体を他方は精神を所有しようとしたにすぎないので facts から切り離された Elliot 家の人々の facts の世界への憧れ、weakly people の the health and beauty that lie so promiscuously about the world. (p.140) への欲求がしからしめたことなのだ。

ところが Rickie はまた父の恋の相手であった母の血も受け継いでい

る。また彼の人を愛する精神においては叔母の相手 Mr. Failing の精神的後継者でもあったのだ。上の二人の結婚生活は、相手の Elliot 兄妹の不誠実さにより不幸なものとなるが、彼ら自身に弱点がなかったわけではない。Mrs. Elliot は Mr. Failing の弟子で Wiltshire の大地を耕していた *Lady Chatterley's Lover* の獵場の番人に相当する Robert に愛されて駆落ちする。Whitman に讚えられるような「神経からではなく魂から生れた」(p.264) 二人の愛は理想的に見える。しかし Robert が急死すると、彼女は後は慢然と時を刻む ('beat time') のみだと考え、Mr. Elliot の要請に応じて家へ戻る。しかし 'beat time' というようなことはこの世の中にはなく、Robert の子 Stephen が生れると、彼女はまだ人を愛することのできる自分を見出す。しかし convention に守られている以上その代価は支払わねばならず、Stephen を手離し Mr. Failing に預けねばならない。Stephen 向う筈であった愛情は Rickie に向けられ、その打ちとけない intimacy を欠く愛は Rickie の行動を支配する大きな要因となる。'beat time' を生活の方針とした時、彼女の弱さがあらわれるが、そもそも Mr. Elliot と結婚したことに過ちがあった。「Elliot 家へ嫁ぐ」と言うと素晴しく聞えた。文なしで世間知らずの娘が弁護士 Mr. Elliot に求婚されて断わることは困難であったろう。だが彼女に相手を見る眼がなかったことは否定できない。

小説中では触れていないが、Mr. Failing に夫人との結婚を決意させたものを想像すると、彼が牧師の妻の不義の子というハンディキャップを持ち、跛ではあるが美貌と明晰な頭脳を誇る彼の思想の崇拜者から激しく愛されたを考えることができる。ところが夫人が彼を愛さなくなると、「彼の頭脳は明晰さを失い、健康は衰え、自らの仕事の後継者をもたないことを知った」(p.114) のである。夫人の言葉だから割引して理解しなければならないが、彼は「人間はお互に愛し合うべきか否か疑問に思い、最も不幸な人として死んだ。」(pp.303—4) のである。彼の著書が死後に再評価されていることも事実だが、作者は Mr. Failing を全面的に肯定的な眼で見ていない。彼にも Elliot 家の血を見破る眼はなかったのだ。

極めて概略的に言えば、Elliot 兄妹の配偶者はそれぞれ温い愛情はもつていたが、Ansell が理想とする本物と偽物を区別する鋭い洞察力に欠け

ていたと言える。

Rickie はこの二人の弱点をも受け継いでいたのである。彼は父と叔母がその配偶者達と一世代前に演じた情念の劇の余波を受けて、いずれの側の衝動にも動かされながら彼自身の劇を演じてゆく。Rickie の立場の皮肉さは、彼が母の幻影を追い父を嫌悪すればするほど、実は彼自身が父や叔母と同じ過ちを繰り返すことになるという点にある。彼が Stephen を accept することができるかどうかということは彼自身の問題にとどまらず、母の世代の情念の劇に望ましい結着をつけられるかどうかという問題でもあるのだ。またそれは一家族の問題を越えて中産階級上層の人々のもつゆがみにも関わってくる問題なのである。その課題を Rickie は生身の人間としては遂に果し得ず破滅に到る。Elliot 家の血とその配偶者の弱さが Rickie の内で勝を占めたのである。

物語は時間の流れに従って展開しない。Rickie の行動の発展とともに、彼の父や叔母の行跡が明るみに出され、彼の背負っている過去が徐々に前面に出て来る。Rickie の運命は一世代前の人々が織りなしたパターンのヴァリエーションを構成しながら、品をかえ形をかえて執拗に巧妙に織り込まれてゆく数々のイメージのつくる小さなリズムを包含する大きなリズムとなって一つの交響曲をつくりあげている。

Rickie は Stephen の代りに母に愛されたが、この the second best の位置が Agnesとの場合にも繰り返される。Mrs. Failing が Mrs. Elliot と Robert の恋を讃美したように、Rickie は Agnes と Gerald のラヴ・シーンにヴィジョンを見る。これらがいずれも物語の初めと終りに歴史的時間と逆の順序に置かれ、相照応して独得の効果をあげている。ここにこの小説の特異性があり、これが小説を複雑にし読みにくくしている点でもある。しかし、この手法は、少いスペースに多量の素材を集約していく密度を高くしているとも言えよう。この小説はこういう手法で描かれた一家族の滅亡の物語でもある。家のテーマを集めするものは、作中で繰り返される、Rickie が夢の中に聞く “Let them die out!” という彼の母の声であり、これは Elliot 家のみならず、精神的な価値を見失った英國中産階級上層に向って投げつけられた呪いの言葉でもある。それは結局 Elliot 家の人々すべての死とともに実現される。

IV

それでは新しく建設されるべき価値は何か。Rickie は死によって Stephen の生命を救い、その小説の死後の成功により Stephen に経済的な救いをもたらす。最後の場面では、この小説で一貫して用いられて来た「家」のシンボルが大きく前面に出て来る。Stephen の家が新しく Wiltshire に建ったのである。それは Mr. Failing が夢に見、Mrs. Elliot が切望し、誰よりも自らの精神の故郷を求めて遍歴した Rickie の求めた「家」であった。それはまた、Rickie が Wiltshire にこそ適わしいと考えた national shrine でもあった。家の外には Stephen が、中には Ansell がいる。この二人が新しき価値を支えるものであることは明らかであろう。

Ansell の原理は distinction の原理であり、これが Rickie, Mr. Failing, Mrs. Elliot のよく実現できなかつたものであることは既に見た通りである。Agnes を斥け、Stephen をとる彼の intellect は大切なことを見抜く能力を持った父から受け継いだものである。彼が中産階級の間では軽蔑された「店を開いている」家の出身であり facts に触れながら育った、いわば中産階級中層に属することも見逃せないことである。Stephen は Wiltshire の農民 Robert と「unselfish でありながら capacities for life をもっていた」(p.119) Mrs. Elliot の恋の結果生れ Wiltshire の downs で羊飼とともに育った自然の子である。

この二人が共にもっており、Rickie に欠けていたのは驚きと恐怖に満みた不安な世界の不思議さを不思議さとして受けとり、その中に一步踏み出す勇気であった。二人には驚きを驚きとして受けとめて、illusion に救いを求めては break down することのない、人生に生々と反応する主体性を見出すことができる。Ansell は fellowship の論文に失敗しても、それはあくまでも failure であり disillusionment ではない。Stephen には Fleance と格闘して負かされると率直にその事実を accept する挿話がある。彼にとってはそれが「象徴的瞬間」なのだ。二人の uncorruptibility はその性格は違うが共通の価値に由来する。価値の創造を簡潔に表現している比喩に wine of life と teacup of experience の比喩がある。青年は wine of life にみちているがまだ teacup of experi-

ence を味わっていない。しかし、それを飲まないと死なねばならぬ。だからと言っていつも飲まねばならないとは限らない。ここに問題と救いがある。“I will experience no longer. I will create. I will be an experience.”(p.72) と言って hostess に cup を投げつけることのできる瞬間が来る。しかし、これを行うには both acute and heroic でなければならぬ。これは「象徴的瞬間」を別の言葉で言ったものであろう。acute と heroic は head と heart と相当するだろう。

Ansell は head から出発して、自らの中で head と heart を結びつけ experience となると考えられる。あくまでも head の原理に従う傍観者ではあるが、批判することにより、create させる者と言える。Rickie はその生涯においては experience となることはなかったが、死後成功を収める小説を書いたとき、それを成就していたと言える。それも Ansell と Stephen の後押しがあって初めて出来たことである。しかし少くともその時には Ansell に冒頭で批判された彼の diseased imagination は creative imagination に変っていたのであり、これが今度は Stephen を支えるエネルギーとなるのである。

Stephen は二つの原理を一身に統一して experience そのものとなり、その価値を生きるものと言えよう。人物の形で表わされたものの中では彼において作者の理想像に最も近いものを見ることができよう。ところが realistic な面と racial essence の symbol としての面を兼ね備えた人物としては、その意図は分るが十分に成功しているとは言えない F.R. Leavis などから批判される。しかし Peter Burra のように高く評価する批評家もあるのであって、少くとも Rickie の antithesis としては見事に成功していると言える。問題は英國の現実から見た場合彼のような存在は信じ難いということなのであろうが、小説の世界に関する限り彼も十分説得力を持っているのである。また小説全体における作者の意図の中心は Stephen にあるのではなく、Rickie の生き方を批判的に描きながら、小説に秩序ある美しさを与えることにある。どの人物も一つの creation を構成する要素として働いているのであって、例えば Ansell にしても Mr. Failing にしても実際はこれまでの概括化では捉えがたい ‘round’ な人物として描かれていて、それ故にプロットに反抗しながら結局小説全体のつくる美の世界の一要素となっている。殊に Ansell, Rickie,

Stephen が三巴となり衝突し反発し結び合う過程は最も魅力的である。そして小説を読み終った時、最もよく新しい価値を代表する Stephen も前面から姿を消して他の人物と一緒にになって小説のつくりあげる音楽的な美しさの中に溶け入ってしまう。火、中心のシンボル、川、踏切り、chalk land, オリオン座、デメーテル、窓や茶碗の破壊、dragon、家、突然の死などのイメージが巧妙に用いられ Forster のいわゆるリズミックな効果をあげており、また人物は各自の性格に従って動けば動くほどプロットの完成を促すことになり、この二つがあいまって小説に秩序をもたらし、各人物の弱さをあくまでも弱さとして描きながら作者の inner reality を各人物に与えることになっている。Trilling が人物を sheep と goats に分けたのは誤りだと J. B. Beer が言うのも、こういうことを指すのであろう。また thoughts と emotions がたとい協力していくなくとも激しくぶつかり合っていると Forster が言うのも、truth と love を結びつけた理想的な人間像という内容とは別に、こういうことをも指しているのではなかろうか。とにかく *The Longest Journey* では connection と distinction, one と many, innocence と experience, love と truth が反発し合体しながら特異な reality を生み出している。

再び内容に戻るならば love と truth の止揚されたところに真の愛が、creative imagination が生れ、その愛がまた truth と衝突して弁証法を繰り返すのである。このたえざる弁証法に耐える強い愛の上にこそ Forster の信ずる人間関係が成り立つのである。支配、被支配、所有、被所有という力関係を越えたところで、Stephen の言う「君がそこにいて、僕はここにいる」という互に独立した個人と個人の結びつきが可能になるのである。

ところでこの小説の真面目はまさにこのことを知識としては知りながら、自らの弱さのために過ちに落ち込んでいった Rickie の皮肉な悲劇を描くことによって、真実を認識しそれと直面することの重要さを訴えていることにある。ここで真実を認識することは自己の真実を認識することであり、Rickie にとってそれは跛である自らの肉体から逃れようとするところなくそれを受け入れることであった。それのみが彼を diseased imagination へと駆立てる衝動から解放したであろう。*The Longest Journey* もまた、「汝自身を知れ」という哲学の古い問題の文学的表現だったのである。むし

ろ具体的な人生の場において Rickie という一つの個別的な例を追究することによってかえってより一層哲学的になっていると言つていいであろう。

そして人間関係の倫理は自らが ‘reliable’ になることであった。‘reliable’ とは他人に対してのみならず自己に対しても言わわれているのである。‘reliable’ であるとは他に保証がなくても存在し得るということであり、それが即ち ‘real’ ということであろう。Ansell の sense of reality に照らせば the great world は存在しないものであった。これは今の Forster の見解であるが^①、それは彼の大文字の Belief の拒否やいかなる cause にも組しない態度に通じるものである。それは人間に「関する」思想ではなく人間と人間の結びつきを信じるという極めて平凡な信条と表裏一体をなすものであろう。一方の徹底的な拒絶は他方の徹底的な信仰を示すのであって、その人間関係の信条を支えているのは優しさと無執着が密接に結びついた精神であり、その奥底には神を信じて殉教をも辞さない熱烈な信仰者の魂にも似た魂が燃えているのである。^②

[注]

- ① G. D. Klingopulos, ‘Mr. Forster’s Good Influence’, *The Pelican Guide to English Literature*. 7 The Modern Age, 1961, p. 246.
- ② Malcolm Cowley (ed.), *Writers at Work, The Paris Review Interview*, 1958, p. 31 で、Forster は、「あなた自身を描いた人物は」と問われて「誰よりも Rickie」と答えている。
- ③ *The Longest Journey*についての Forster 自身の意見、感想は次の中を見られる。
 - Malcolm Cowley (ed.) , *op. cit.*, pp. 25—33 *passim*.
 - ‘E. M. Forster’s Views and Memories — An interview recorded for television by David Jones’ 「英語研究」 May, 1959, p. 62 (*Listener*, Jan. 1, 1959より転載)
 - Angus Wilson, ‘A Conversation with E. M. Forster’, *Encounter*, Nov. 1957, pp. 52—7 *passim*.
 - *The Longest Journey* (The world’s Classics) 1960. につづら

れた Forster の introduction.

- ④ () 内は *The Longest Journey* (Arnold Pocket Edition) の
頁数を示す。以下同様。
- ⑤ E. M. Forster, 'Notes on the English Character', *Abinger Harvest* (Arnold), p.11.
- ⑥ V. Woolf, 'The Novels of E. M. Forster', *The Death of the Moth and Other Essays*, (Penguin), p.143.
- ⑦ J. B. Beer, *The Achievement of E. M. Forster* 1962, pp.94—5.
- ⑧ E. M. Forster, *Two Cheers for Democracy* (Arnold), p.78参照。
- ⑨ F. R. Leavis, 'E. M. Forster', *The Common Pursuit*, p.268.
J. K. Johnstone, *The Bloomsbury Group*, p.188.
- ⑩ Peter Burra, Introduction to *A Passage to India* (Everyman's Library) p.xxiii; pp.xxvii—viii.
- ⑪ J. B. Beer, *op. cit.*, p.83.
- ⑫ E. M. Forster, Introduction to *The Longest Journey* (The World's Classics), p.xi.
- ⑬ 最初に述べたように、この小論では、自分の言いたいことに最も近づいていると Forster がいっている作品において、彼の「言いたいこと」を探求することによって彼の精神に迫ろうとしたのであるが、その彼の「言いたいこと」と彼自身の体験とのかかわりについては触れなかつた。この作品を中心として彼における体験と創作の問題を考えることは興味深いことであるが、これについては別に考えることにしたい。

(May, 1965)